

福島の 児童文学者

10

うめみや
えいすけ

平成六年一月二十日。一人の画家がこの世を去った。彼の名は『梅宮英亮』（うめみや・えいすけ）。享年五十二歳であった。

梅宮氏は、福島大学教育学部美術科教授を勤める傍ら、独立美術協会・県美術協会等に所属する画家であり、絵本『にじのカーネーション』・『金のゆき』で知られる絵本作家でもあった。

〔梅宮英亮の経歴〕

梅宮氏は、昭和十六年福島市に生まれた。昭和三十五年三月に福島高校を卒業、同年四月福島大学学芸学部（現在の教育学部美術科）に入学し、昭和四十年三月に卒業。その後、須賀川女子高等学校等で美術教師を勤め、昭和四十九年から母校福島大学で教鞭をとった。

〔画家 梅宮 英亮〕

絵を一生の仕事と決心し、美術科に入学した梅宮氏は、学生時代に旧東京都美術の三十回記念独立展に百五十号の絵二点を初出品したが、その作品は残念ながら落選してしまう。しかし、

その返送のために出かけた会場で、林啓二氏の作品と出会うこととなる。

そして、『美しく生きていく』としか表現しようのない見事さを見せつけられ、自分の作品の未熟さを実感したという。それは、「文章で表現出来ないものは無い。」と語った作家に対して、「文字の尽きたところから絵は始まる。」と語った、馬越陽子氏の言葉に頷けるような、圧倒的な感動であった。林氏の絵は、当時絵に疑問を感じ始めていた彼に、実に意味深い啓示を与え、それが自分の求めていた世界そのものであったことを実感させた。

その後、林氏を目標に制作をするようになり、翌年（昭和三十八年）春には河北展で特選を受賞。秋の三十一回独立展でも初入選を果たした。それからも連続入選を重ね、四十一回独立展での独立賞に結びつき、その後の画家・梅宮英亮となるのである。

〔絵本作家・うめみやえいすけ〕

絵本作家・うめみやえいすけ誕生のきっかけは、昭和五十六年秋に東京都美術館で開かれた、第四十九回独立美術協会展に出品した「海を抱く女」であった。

この絵の魅力にひかれた、福武書店児童書籍部編集者・松居友氏からの、「絵本を作ってみませんか。」の勧めがあり、油絵が専門であったうめみや氏は、一カ月以上も迷ったそうだが、「ク

レヨンなどの素材を使った油絵以外の世界にも挑んでみたい。」と決心し、制作を引き受けたのである。

●処女作品『にじのカーネーション』

（昭和五十九年四月発行）

主人公みかちゃん、夢でみた虹のカーネーションを探しに不思議な雪の森にかけます。七色のカーネーションを、母の日のプレゼントにしようと思ひ…。

このお話は、二人のお嬢さんにお風呂で話したいろいろな物語の中から、「競争心や自己中心的なことばかりが目立つ今の世の中で、森の動物たちと女の子が力を合わせ、一つの物語を成し遂げていく勇気と愛情」をテーマとして取り上げ表現したものです。

ちなみに主人公の「みか」という名前は、二人のお嬢さんの名前から一字ずつとってつけたものです。

画材は何種類もの紙を試し、クレパス・クレヨン・パステル・色鉛筆・色インク・ボールペンなどあらゆる材料を使い、丸二年を費やして完成させたもので、美しい色彩が織りなす絵本であり、それが印刷でも生かされています。

●二作目『金のゆき』

（昭和六十二年十月発行）

森で育った心優しい少年は、クリスマス・イヴの晩なおなかをすかせている森の動物たちを救おうと、街にかけますが…。

この本は、「クリスマス・イヴに森の動物たちが語りつたえているというおはなしです。」との書き出しで始められており、心優しい少年とはキリストさまでは？そんな気持ちにさせる、夢のように繊細な筆致で描かれた美しい物語です。

どちらの作品もさすがに画家としてのタツチが感じられ、「思いやりの心」を伝えようとして書かれた絵本である。美しい色彩が印象的であり、絵本原画展にも招待出品している。

子どもの本の世界で代表的な、松居氏に見初められたうめみや氏は、やはり素晴らしい「絵本作家」であった。もつと子どもたちのために、「思いやりの心」を伝える、美しい色彩が織りなす夢あふれる絵本を、たくさん残して欲しかった。とても残念に思えてならない。

心より、ご冥福をお祈りします。

参考文献

- 『ふくしまの芸術文化』（福島県芸術文化団体連絡会 発行）
- 『福島の美術家たちII』（福島県立美術館 編・発行）